

OB と語る会 2006 年度実施報告

2006 年度世話役 横国化学会 前会長
禪 知明 (平成元年物工卒)

2001 年秋季以来開催してきた「OB と語る会」を今年度も下記日程により執り行いました。

2006 年度

(第 1, 2 回春季 学部 3 年生の授業, 第 3, 4 回秋季 修士対象) 講師敬称略

第 1 回: 7 月 11 日 (火)

笠松 隆志 (バリアンテクノロジーズジャパン: 物工 平成 4 年卒)

金子 守正 (旭化成メディカル(株): 応化 昭和 46 年卒)

第 2 回: 7 月 18 日 (火)

石井 輝秋 (パナソニック ストレージバッテリー (株): 電化 昭和 47 年卒)

伊藤 誠 ((株)日本電気: 電化 昭和 49 年卒)

第 3 回: 11 月 17 日 (金)

松風 紀之 (日産自動車(株): 物工 平成 3 年卒)

伊藤 誠悟 ((株)東芝セミコンダクター社: 物工 平成 3 年卒)

川崎 謙一 (本田技研工業(株): 物工 平成 6 年卒)

第 4 回: 11 月 24 日 (金)

野木 一男 (元・横浜市立環境研究所: 応化 昭和 38 年 2 部卒)

天野 皓司 (元・シーアイ化成(株): 応化 昭和 40 年卒)

小西 正三郎 (新日本石油(株): 物工 平成 2 年卒)

2006 年度は 3 年生を対象として 7 月に開催しましたが、修士 1 年生を対象としては昨年度この会に参加した大学院生からの意見・要望を反映させて、進学・就職を考え活動を始める時期 (修士 1 年生の秋頃) の 11 月に開催しました。

3 年生対象の開催は「OB と語る会」前半の「卒業生による講演会」を 3 年次の演習授業時間の 1 時間半を使って行い、その後場所を化学棟リフレッシュルームやゼミ室に移して後半の「懇談会」を行いました。前半は授業時間内ですので学生ほぼ全員が出席しましたが、後半は場所の移動もあり半分以下の参加となりました。それでも直接 OB の方に率直にお話が伺えるとあって問答が尽きませんでした。

修士 1 年生対象 (興味のある他の学年生も含む) の開催は 1 回目は参加者が多く、就職活動を迎えてかなり細

かい問答もあり随分参考となったようです。2 回目は休日と土曜日の間の金曜日と日程が悪く (?), 講師に 3 名もお越しいただいたのに学生は 10 名足らず、懇談会では 6, 7 名の参加でしたが、内容の深いお話ができその学生たちは大いに満足していました。しかしせっかくの機会を有効に使えないのは残念ですので、来年度以降の開催には同窓会の努力だけでなく学生と教員の参画もより必要ではないでしょうか。大学の方針としても「ホームカミングデー」の開催のように「卒業生との連携を深める」ことに目を向け始めていますし、

講師の皆様のご講演には独自のお話しに加え、次の 5 項目を挿んで頂くようお願いしました。多くの重みある言葉をいただきました。

1. 卒業後の仕事の変遷と現在の仕事
2. 大学の学部や大学院で学んだこと・身に付けたことで仕事に役に立ったこと、役には立たなかったこと
3. 仕事の上でとても必要・重要と思った知識・手法・科目等
4. 学生の間でやっておくのが良いと思われること (学問に限らず生活面でも、またご自身の体験談も)
5. 学生が将来を考えるにあたってのアドバイス (就職活動も含めて)

これらの言葉は、学生のみならず卒業生・教職員にもグッと考えさせられます。時間としては短いですが、拝聴した学生には心に留め、将来に生かしていただきたいです。

何名かの講師の方にはこのことにも一部触れていただいて本誌にご寄稿いただいておりますのでご覧ください。

参加した学生には感想文をしたためて提出していただきました。整理してとも思いましたが、「生」の声を便宜上数個の小見出しに括って列挙することにします。(ほぼ同じ内容は一緒にしました)

【講演について】

- ・サンプルや資料を多く用意していただき分かりやすかった
- ・企業の方のお話を聞く機会がこれまでなかったので参考になった

- 最近、実験や授業で触れている部分の話に興味を持って理解できた
- 「自分の仕事は自分です」という当たり前の話が非常に胸に残る言葉だった。
- (学生として) これからの心構えを伺えてよかった
- 講師が入社してからなされてきたことや現在の仕事のお話をもっと伺いたかった
- 今日の講演で技術者に何が求められているのかが少し分かった

【講演を拝聴しての感想】

- 医療工学という分野を全く知らなかったので新鮮
- 医療機器にも化学の知識が多く必要と知り意外
- 病気から人を助けるために薬学だけでなく工学も貢献することが多いことを実感
- 電池は高校で習うくらい古いものだと思っていたが、今も改良の余地はあり最先端の技術であることに驚いた。古いからといって興味をなくしてはいけないと感じた
- 時代のニーズに沿って新しいものを開発していくには常に新しいことを学んでいかなければならないと思った
- 品質管理ということがいかに大切かを知った
- 自動車の中はマイコンだらけで、それがまた安全を高めていることに驚いた
- 自動車は最新技術の集合体であると改めて感じた
- 分析の技術が実際にどのような現場で使われているのかがわかった
- 自分の分野だけでなく、商品を提供する分野についても広い視野を持たなければならないと感じた
- 大学紛争のあった期間に大学に通っていた方にはじめてお会いしてびっくりした
- 普段学んでいることとは異なる実学の話が聞けた
- ふだん疑問に思っていた内容の講義もあり役立った
- 教えてもらったことだけでなく、考え方を知ることが大事だと思った
- 現在の企業は世界シェアを多くもつことが多いので、英語が苦手な自分が心配
- 大学で学んだことは大学だけでは完結させず社会に出てからも使える知識を得ることが大事で、それをいかに自分の仕事に活かしていくかが重要だと感じた
- やはり世の中は自動車の時代なんだと実感
- 「会社を利用する」とは入社してから役立つ言葉だ
- 社会人になるために自分がこれから何を考え、何をしていけばよいのかという点で有意義
- 大事なことはやる気があれば何でもやれるものだ
- 「自分にあう仕事は？」という問いに対して「これから分かることだ」と答えていただき少し安心した
- 就職後に勉強の柔軟さが重要となってくるのが分かった

- これまで大学で学んできたことを活かすことも大事だが、新しいことにチャレンジすることも重要
- 留学の経験のお話は有意義
- 目標をもつことの大切さ
- アメリカ人と日本人の考え方の違いの大きさに驚いた
- 社会人としての赤裸々な略歴をきくことができた
- 講師と(講師が卒業した研究室の)先生が楽しそうに話しているのをみて十年後に自分もこうありたいと感じた

【企業というところをどう感じたか】

- 他人が自分のためにやるということはない、という厳しさを痛感
- 理系の会社なのにどの部署も営業に近いところにあるようで意外
- 自分の研究する分野を長期間、日々改善していくのは素晴らしい
- この物質工学科を卒業したことが生かされるような研究開発のできる会社に入りたい
- 時代のニーズに対応できる技術者を企業は必要としていて、それができる企業が日本の科学技術をリードしているのだろう
- クレーム対応は大変
- 会社の信頼性は大切
- 労働賃金が安い地域との競争に勝つためにも品質等の価格面以外での付加価値が大切になっていくことを間近に理解することができた
- 工学という分野で必ず考えなければならない「経営」という部分の話が聞けて、なるほど、と思うところも多かった
- 研究開発と商品開発は違うことが分かった
- どんな会社、部署にいても根気強く続けていくことが大切
- 海外に留学できるシステムがある会社は素晴らしい
- 中小企業であっても大企業に負けない生産性を生み出したりするバイタリティーに感銘
- 生産上都合が良くても市場の要求に応えうる生産でないと大量の在庫になってしまい会社の利益にはならない。それを避ける方法を考えるのは大変重要
- より良い体制をつくるには困難も大きい
- 一言で「ものづくり」と言ってもいろいろな条件をクリアするには大変で奥深さを知った
- 付加価値が高く、かつ安価な材料をつくらなければ、面白い材料をつくってもむだになってしまうことを実感
- 企業の合併という貴重な体験談をきけた
- 無駄をなくす、という当たり前のことの難しさを実感

【求められている人材は】

- 専門性の高い自立できる人材を求められている

- まず名前を覚えてもらうことの大切
- 先輩方との縦のつながりを大切にしたい
- 多くの人とのコミュニケーションが必要
- 会社に入ってから人間関係などどのように変わっていくかを垣間見れた
- 人脈も大事、体も大事
- 海外に行ったり学会に出たりして自分から知識をつけることが大事

【学生時代に何をすべきか】

- 自分が目標とする道が何か、それを達成するために学部時代をいかに使うかをもう一度よく考えたい
- 研究室では、体力・持久力や自分で考え抜く力をつけ社会に役立つようにする力が必要
- 大学での勉強をあまり範囲を狭めずに、やりたいことに従事（就職）できるようがんばりたい
- 1つのことについて深く知り説明する能力の必要性を感じた
- 情報をどのように整理し、解析するかを自分で考えることが大切
- 身近なものでも今なお改良されていることに興味をもつ
- 大学で学んだことと別分野で働く可能性もあるので、残された大学生活の中で考える姿勢、問題を解決する能力を伸ばしていきたい
- 学生時代に専門分野の知識を勉強するだけでなく、違う分野の知識も見習って、先生方の研究をいろいろ知ることが人脈を作ることにもなり将来役立つと感じた

【講演を拝聴しての願望・決意】

- 興味のある分野を一生かかっても研究したい
- 今、学んでいる基礎的な学問を応用して、実社会でどのようなことができるのかを考えることの難しさを感じ

じたが、それを克服すればそれに見合うだけのものが得られるという工学部特有のやりがいや垣間見た気もする

- 半導体のお客さんは2人に1人は外国人なので外国語（英語）が必須。英語は勉強しなくてはと思った
- 自分のしている仕事に誇りを持って他人に自慢できるようにになりたい
- 自分の専門分野を伸ばすことはもちろん、興味を持ったことに少しでも自分の知識を広げたい

毎回学生の皆さんに意見・感想文には「～しなければならなかった」と、「～したいと思った」、「～が役立った」という語尾がごく当然ですが、「～ということに驚いた」という語尾が今年度の「OBと語る会」では特に多かった。大げさに言うと、これまでにかなり固定された先入観をもっていた観念や事象について講師の皆様のお話を伺って覆った、ということに学生の皆さんが驚きと新鮮さをもったということであり、この会のねらいとしても嬉しい結果であり、一人一人がそれを日々の糧として欲しいです。

講師の方のお話の内容については、勤務先の中での仕事についてもっと聞きたかったという意見がある一方、役に立った科目や知識や就職活動の体験論をもっと伺いたかったという意見も多く、今後のOBと語る会の運営内容に反映していきたいと考えています。

「OBと語る会」の開催は、3つの同窓会が統合され「国大化学会」となってからも主幹事業として進めていきます。卒業生、役員の方々、同窓会事務局、そして学生と卒業生を繋いで下さる学内の先生方のご協力が合わさってはじめて成立しますので、今後もこの素晴らしい事業を続けて行けますよう皆様のご協力をお願い致します。

OB と語る会

笠松 隆志

(平成4年物工卒, 平成9年博士課程後期修了,
バリアン テクノロジーズ ジャパン リミテッド勤務)

1997年4月に小林憲正先生の研究室を修了しました笠松隆志と申します。研究室では化学進化に関する研究を行っていました。そのときに生成物の分析手法として用いていたクロマトグラフという手法が縁で、現在はバリアン テクノロジーズ ジャパン リミテッドという会社に勤めております。

バリアンという会社は、有機、無機全般にわたる分析機器のメーカーで、私はその中のクロマトグラフ部門でアプリケーションという仕事をしております。アプリケーションの仕事は、ある分析対象物質に対する分析手法の提案を行ったり、顧客に対して分析装置のデモンストレーションを行ったりすることがメインとなっています。具体的には、実際に分析装置を使って顧客の対象物質の分析データを取得し、報告をして装置購入を検討していただく、といったことをしております。最近では、2006年5月に施行された食品の安全に関する「ポジティブリスト制度」により、ガスクロマトグラフ質量分析計(GC/MS)の発展型であるGC/MS/MSによる食品中の残留農薬分析などがホットな話題となっております。また、水や環境中の有害成分の調査、監視など、分析装置は意外と身近なところに役立っており、そのような分析を行う機関のお手伝いもさせていただいております。

さて、昨夏の「OB と語る会」では、お話をさせていただく機会をいただきましてありがとうございました。私自身、会社で働き始めてまだ10年に満たないので、社会の先輩としてはあまり学生の皆様にお役に立つことはお話できず(むしろ私も諸先輩方のご講演がとてもためになったぐらいです)、自身の業務内容についてを中心にお話させていただきましたが、大勢の人を前にして、自分の仕事内容を他の人に話す機会はなかなかありません。



るので、新鮮な気分で話をすることができました。発表については、自分自身の準備不足のせいで、あまり満足できるものではなかったと思います。やはり何事も準備はしっかりとしておかなくてはならないと、今でも反省しきりです。そういう点では、私の話したかった内容がしっかりと学生の皆様に伝わったかどうかはわかりませんが、少しでも分析といったものが社会の役に立っていることが伝わっていれば幸いです。

最後となりますが、私自身「OB と語る会」に講師として参加させていただくことにより、久々に母校を訪れることができました。社会人となり、日々の仕事に追われていると、なかなか母校を訪れる機会というものは作りづらくなってしまいます。このような会を開催していただくと、OBの方々も母校を訪れる機会が増えてよいのではないかと思います。また、懇親会の場において、OBと学生が会話ができる機会があったのもよかったと思います。

今後も「OB と語る会」が継続して開催され、OBと現役の学生の交流が活発になること、そして国大化学会および関係者の皆様のご発展をお祈りいたします。

志は一寸高く

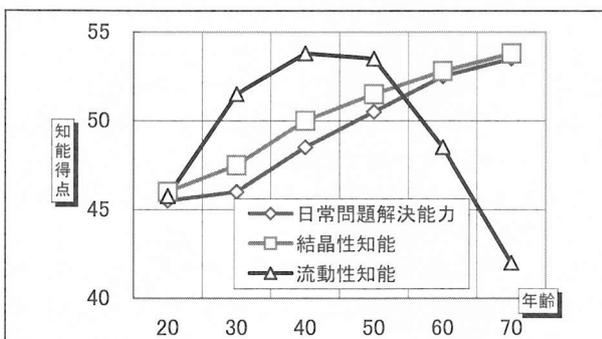
金子 守正 (昭和46年応化卒,
旭化成メディカル株式会社勤務)

(1) 社会人スタート時期: TV番組「スター千一夜」のCMでは、旭化成は総合化学会社であった。71年の頃は、繊維売上は69%で、住宅、石油化学、食品・発酵と言った脱繊維への展開が活発な時期であった。そして、初任配属はアセテート工場という繊維部門であった。土曜日は、都市勤務者が午前中のみに対し、工場地区は通常勤務。新興アジアから安価な繊維流入のためと日米繊維交渉で縄(沖縄)をとって糸(繊維産業の活路)は閉ざされた。中でも製品の特徴を価格への転換の難しいアセテート繊維は生産調整、1時帰休、撤収という流れとなった。ちょうどこのような環境の中、アセテート中空糸膜の開発グループが医療用繊維として継続した。



2006年10月にデトロイトのフォード社ルージュトラック工場を見学した時の玄関前での写真です。産業の原点として大変勉強になりました。

知能得点の種類別の年齢による変化



秋山弘子, 高齢社会における人間観の変容, in 東京大学公開講座75「ヒト, 人, 人間」東京大学出版会, 175-200頁, 2002年

結晶性知能: その人のこれまでの経験, 知識の豊かさや正確さがむすびついている能力

流動性知能: 人が生活してゆくためのいろいろな情報をとらえて, それを操作することをするような能力. 新しいことを学習したり, 新しい環境に適應するために必要な能力

(2) 医療機器事業に参画して: 透析用中空糸は銅アンモニアレーン透析膜が社内で行っており、アセテート中空糸膜は血漿分離膜で世の中の先端を走ることができた。糸切れやピンホール、溶血(赤血球破壊)発生で同じ糸が紡糸できず、試行錯誤の日々も多かった。結果的には、医療の中にアフレーション学会という血液透析と同様な血液浄化治療法の発

展に結びついた。薬のみでは治療困難な疾患に多くの保険医療が適用となってきている。このような医療の黎明期に携り、まだ残っている数少ない存在となっている。当然ながらそこには越え難い先輩方の存在が大きい。高田弘吉さん(S18/9卒)、萩原武明さん(S40卒)のこの領域の思い入れという点では、大いに鍛えられた。

(3) 学生諸君に一寸ひとこと

- 生活の手段としての職業は尊い。しかし、貧しくとも、寝食を忘れ、物事に打ちこめる職業に就けることは幸福である。
- 「志が高ければ不幸になり、志が低ければ馬鹿になる。」最近、工学の最先端講演会の中で、殆ど眠っていたが、ふと目を覚ましたときに聞こえてきた言葉である。
- 引用の図は、高齢化は、ともすると介護対象、厄介もの視というイメージが支配的であるが、若い時の「流動性知能」による挑戦、経験の蓄積が、日常問題解決能力へ転化し、生涯現役として、社会の活動に貢献してゆけるのではないかと感じている。

「OB と語る会」に参加させていただいて

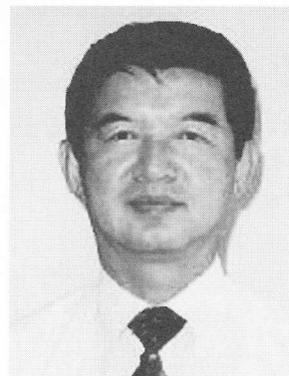
石井 輝秋（昭和 47 年電化卒、
パナソニック ストレージバッテリー(株)勤務)

2006 年 7 月 18 日に「OB と語る会」に参加し「自動車用バッテリーの技術変遷」という表題で話をさせていただきました。

私は、1972 年電気化学科を卒業後、松下電器産業(株)に入社し、自動車用の鉛蓄電池を製造する蓄電池事業部に配属されました。当時、関東では松下の知名度はそれほど高くなく、まして、カーバッテリーを生産していることは殆ど知られていない状況でした。その頃、網島に子会社の松下通信工業(株)があり、横浜の実家から 40～50 分で通えるので、そこに行けたらと思っていましたが、配属先が茅ヶ崎の工場と知り、通勤ラッシュと反対なので、「それも良いか」とのん気に構えておりました。

その時代の花形電気商品と言えば、カラーテレビ、4 チャンネルステレオ、カーステレオ、エアコン（クーラーと呼んでいた）等であり、それらに比べてなんと地味な商品分野であったことかと思ひ、更にカーバッテリーは業界 5 社の最後発の事業で、市場占有率も最下位の 1 桁台でしたので、いつまで続くのかと思ったことさえありました。ところが、現時点では、ありがたい事に、市場占有率も 20% をゆうに越え、業界 2—3 位まで上昇し、環境問題と資源問題を解決すべきハイブリッドカーやアイドリングストップカー分野での技術対応力とシェアは 1—2 位を競うレベルまでに達しています。私が技術者として取り組んだ個々のテーマは省略いたしますが、少なくとも、新製品、品質向上、軽量化、コストダウン等々のために、知財権、ブラックボックス技術、ノウハウ他を通じて、様々に貢献できたと思っております。

多くの人の注目を集める産業の中に身を置くことは、それだけ成功報酬も大きく、より充実した人生を実感できるものでありますが、そこには非常に大きな競争原理



が働く事も否めません。しかしながら、大志を持って果敢に挑戦される事を好まれる方がいるからこそ、ダイナミックで、ドラスチックな発展が成されるものです。是非、これからの若い方にはそのような気概を持って頂きたいと思っています。私の場合は、自身の器の大きさと、会社採用時の縁のようなものの御蔭で現在の仕事を担当する事に至ったものと思っております。

正直に言って、大学で学んだ事が直接役に立った事はほんの僅かでしたが、事実をありのまま良く見て、現象を正しく理解し、課題が大きくても怯まず、逆にだからこそ解決すれば成果は大きし、自分にとって「ピンチはチャンス」であると思って努力する事が、いかなる分野においても求められるものではないかと思ひます。ニッチであるかも知れませんが、「たかが鉛電池、されど鉛電池」であると思っています。また、2008 年 6 月に定年となりますが、なんとか完走出来そうな所まで来れた幸運に感謝をしております。

最後に、下手な私の話に眠気を抑えながら終了まで着席いただきました皆様に感謝を申し上げます。「辛抱強さ」もまた [大きな力] になる事でしょう。

『OB と語る会』に参加して

松風 紀之（平成3年物工卒、
日産自動車株式会社勤務）

「今度電化材化会が主催する『OB と語る会』で話をしてくれませんか？」

それは2006年に行われた電化材化会クラス幹事会の帰りに、大学・大学院時代にお世話になった米屋特任教授からの一言が始まりでした。そのクラス幹事会に出席していた研究室同期1名、後輩1名の3人との飲み会の席でいきなりです。お酒を飲んでいたせいもあり、私を含めた三人は快諾。「きっと酒の席だし、先生も忘れているだろうなぁ」と思っていたのですが、その後、先生から『OB と語る会』の件、よろしく、一人30分程度で。」とのメールを受信しました。

私は、2006年2月末をもって約13年間お世話になった富士電機アドバンステクノロジー株式会社を退職、現在では日産自動車株式会社パワートレイン生産技術本部に勤務しております。転職を決意するには、それまでに関わってきた研究テーマの将来性に対する不安、研究という分野ではなくモノづくりをやりたいという希望、環境関連技術に関わりたいという夢などいろいろな要因がありました。そんな私が、まさか電化材化会主催の『OB と語る会』で話すとは全く考えておりませんでした。

今回の講演の中では、これまでに大学・大学院における研究室時代のこと、これまでに経験してきた業務内容の紹介、これらを通して今の学生の方々へのアドバイスをとお話致しました。学生の方々に役に立つお話が出来たかどうかは分かりませんが、普段はなかなか会社関連の話が出来ない方々の貴重な講演を聴くことができ、私個人にとっても大変有意義な場であったと感じております。

最後に、偶然にもここ数年で横浜と日産自動車とは、深い繋がりを持つようになってきておりますので、その関わりについてもいくつか紹介させていただきます。

一つ目は2006年2月に横浜国立大学と日産自動車株式会社との間に、『組織的連携に関する覚書』が締結されたことです。今後は両者の間で研究開発における連携、人材の交流などが積極的に行われることになり、その関係はより密接なものになると予想されます。

二つ目は2006年株主総会の席で日産自動車株式会社社長カルロス・ゴーンより、2010年に予定していた銀



横浜国立大学・日産自動車「組織的連携締結」記者会見で



日産自動車株式会社 グローバル本社（イメージ図）

座から横浜みなとみらい地区への本社機能の移転時期が横浜開港150周年となる2009年に1年前倒しと発表されたことです。横浜は日産自動車にとってまさに創業の地であります。この発表の中で、ゴーン社長より、「私どもは故郷の横浜に戻れることをとても楽しみにしております。」との発言がありました。私も故郷の神奈川に戻り、今に至っているわけですので、このフレーズにはつい自分の姿を重ねてしまいました。

このように横浜国立大学や横浜との関係が重視される日産自動車に勤務している私にとっては今回の『OB と語る会』でお話させて頂くことが出来、非常に感謝しております。

今後、横浜国立大学と弊社との繋がりに微力ながら協力させて頂ければ幸いです。

「事務局の意図」と「学生の要望」 ～国大の魅力創出のための視点を変えたアプローチ～

伊藤 誠悟 (平成3年物工卒,
(株)東芝セミコンダクター社勤務)

先日、『OBと語る会』で、米屋研の三名が現M1の学生にお話する機会をいただきました。我々も会社では中堅と呼ばれる立場となり、過去に催された会の話し手の中では若手の部類にあるかと思えます。私は、学生の時に気になった内容をテーマに据えるべく、自身の仕事の変遷や取り組みは敢えて避け、①自分に合う仕事は何か？ ②今までの勉強はどこまで役に立つのか？ の二点についての考えを述べました。会社での様々な経験において、学生時代には気づかなかった自分の本当の適性に出会うことも多かったことから、今は答えを急いで求めず、もっと大きな視野で様々な事柄に向かい合う重要性について、若輩者ながら、学生にわかり易く説きました。お蔭様で、受講した学生達には、内容を十分に理解をしてもらえたようです。この年代のメンバーを講師に据えた事は、ある意味、事務局の新しい挑戦であったと思いますが、学生の真剣な面持ちを見れば、素晴らしい試みであったと思います。このような事務局の取り組みに賛同し、要請に応えた我々ではありますが、予想外のことに気づきました。実は、学生の興味は、我々が想像する以上のもっと切実な所にあったのです。

終了後に催された懇親会にて、学生からは色々な質問を受けましたが、その内容を自分なりに分析すると、全ての学生ではありませんが、多くが、「就職するために、今、何をすればよいのか？」というかなり目先のことに興味があるように感じました。つまり、就職内定の切符をまだ手にしていない学生にとっては、会社に入ってからの話よりも、むしろ会社に入るまで話の方が気になっているようなのです。これは良く考えれば、至極もったもな話であります。しかし、このテーマに絞ると、あまりにも狭い内容となるため、長い目で見た会社生活に対する考えや心構えに対するアドバイスしたいという事務局の期待とかけ離れてしまうことでしょう。でもこの乖離を放っておいていいものなのでしょうか？ (図1)

「事務局の意図」と「学生の要望」……、今後、これら両者を埋めることが、次の事務局の挑戦だと思えます。一方的な押し付けでは、興味が半減するばかりか、本質すらも伝えにくくなる場合があります。実施するからには効果的なイベントにするべきであり、私はその一つの糸口として、マーケティング的思考を取り込むことがあるのではと考えています。近年、企業でも、良いと思うものを作れば売れる時代から、顧客の要求を満足する製品を作る時代へと変わりつつあります。これに対応するため、プロダクト・アウト→マーケット・インへの思

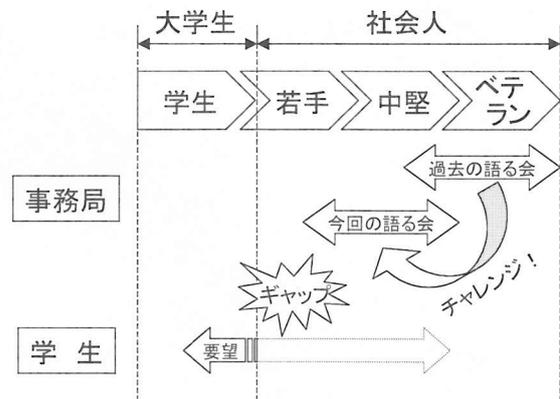


図1 「事務局の意図」と「学生の要望」の乖離

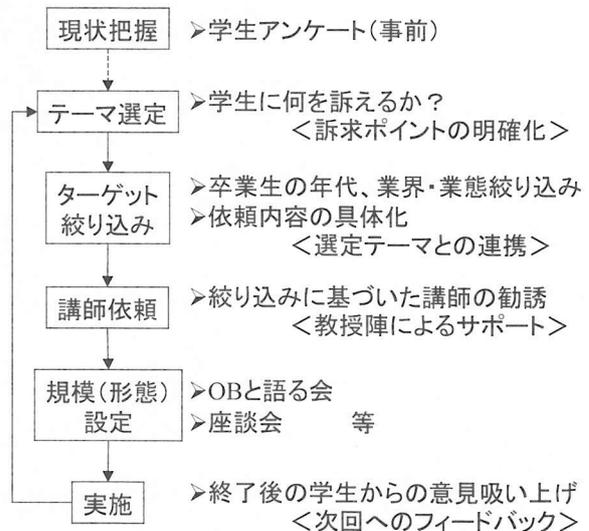


図2 戦略的なイベント企画

想転換をしています。国大も、国立大学法人化され、今まで以上に魅力を創出していくには、視野を変えたアプローチを大学側も考えていく必要があるように思いま

す。

話を本論に戻しますが、とにかく、まずは事務局側が、学生に何を訴えるかについてのテーマを明確にする必要があります。これにより、どういう年代で、どういう業界・業態の卒業生に講師を依頼するターゲットが絞られます。それと同時に、話す内容をもう少し具体化して依頼をした方が良いでしょう。今までのように、何でもいいから話を……という、発表者毎で趣旨にずれが生じ、聞く側も理解し辛くなってしまふ可能性があります。その他として、学生側に対して、アンケート等を実施することにより、現状把握することも重要です。また、終了後のデータを蓄積する事も、次回のフィードバックのためには効果的でしょう。(図2)

もちろん、学生にこのような形で社会に触れさせるのは、『OBと語る会』に限ったものではありません。学生が要望する「就職を目の前にした時の心得」のようなテーマは、『OBと語る会』で汲み取ることができないかもしれませんが、前述の方法に則り、テーマと連携したターゲットを設定すれば、もっと小さい座談会規模とし

ての遂行でも十分効果が上がると思います。そのためには、教授陣が率先して、就職後、数年の社会人に声をかける等、組織的な動きを行うことができれば、予想以上に容易に出来る可能性があります。補足いたしますが、これは決して学生の希望だけを優先しろというものではありません。学生は、今までの経験を元にした自分の視点でしか、まだ物を見ることができませんから、社会に入る前に何を知っておくべきか等の判断は困難です。あくまでテーマを決めるのは事務局です。ポイントは、学生の意見に耳を貸しながら、何を彼らに訴求するかを決定することにあります。

このように、戦略的なテーマ選定を今後は企画していくことが、ひとつの魅力の創出に繋がるのではないかと私は考えます。大きなイベントと小さなイベントを合わせながら、大学として一体となって、学生をサポートする体制、更には、これに卒業生が協力できれば、それによって得られる相乗効果は計り知れません。学生と正面から向かい合うことのできる大学が今後は求められるのではないのでしょうか。

人脈は大切

野木 一男 (昭和 38 年応化 2 部卒)

1. 学生生活と無給助手の二束のわらじ時代

私は、昭和 33 年に入学と同時に、無給助手になり卒業までの間、田丸謙二、横山金一の両先生にお世話になりました。今思うとこの修行が、私の化学屋としての人脈作りの第一歩となりました。当時の応用化学科には、準備室という部屋があり、その部屋は、各先生方が実験や研究に必要な器具類を調達する部屋であると同時に、昼食時には、各先生方のコミュニケーションの場でもありました。当然、私もその場にお邪魔することが多く、多くの先生に顔と名前を覚えていただくことになりました。時には、私の企画による研究室対抗ソフトボール大会をしたり、あるいは、実験室で習得したガラス細工の注文を受けたりといった具合に、コミュニケーションには事欠かない学生生活を体験させていただきました。この人脈作りが、私が社会人となってから、色々な面で役立つことになろうとは当時は、夢にも思いませんでした。

2. 地方公務員時代

私は、卒業と同時に横浜市中心企業センター技術指導係に入所しました。入所と同時に配属になったのは、技術指導係の中の有機化学研究室でした。前任者は、2 年前に退職していましたので、有機研究室は私一人でした。前任者が指導していた業種は、地場産業のスカーフの捺染に使用する製版業界でした。

しかし、私が赴任して半年が経過しても誰も相談にはきてくれませんでした。そこで、私は、製版業界には、約 50 社からなる協同組合があることを知り、研究ネタをみつけるため 50 社全てを訪問することにし、訪問を始



めました。最初は、若僧に何が分かるかといわれ、けんもほろろでしたが、根気よく訪問を続けましたところ次第に技術相談をしてくれるようになりました。

この訪問による人脈づくりが、3 年後に、零細企業の集合体の製版組合の団結となって三菱樹脂と共同で、300 万個のポリバケツのスクリーン印刷に取り組み、その製品を世に出すことができました。

3. 第 2 の人生の出発と現在

私には、16 歳の時から金魚の王様らんちゅうの飼育の趣味があります。趣味の世界のよいところは、あらゆる分野の人達の集まりであるため、情報が極めて豊富なことです。私は、役所を退職すると同時に同じ趣味を持つ金型製造会社(株)明輝の技術顧問として第 2 の人生を出発しました。現在 10 年が経過しましたが、元気で働いております。民間での生活は、学生時代の人脈、地方公務員時代の方々の助けを受け技術開発に精を出しております。「人脈は大切」とは、まさに民間生活そのものです。

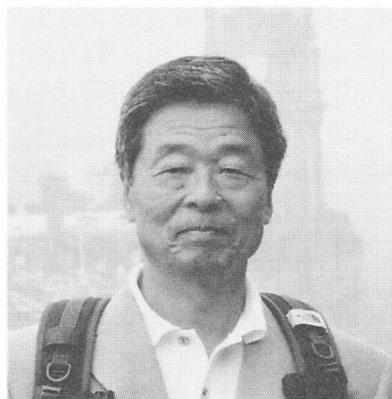
モノづくりへの期待

天野 皓司（昭和40年応化卒）

ほぼ6年前に佐藤菊正先生のご要請を断り切れず、副会長をお引き受け致しましたが、それから暫くして役員会で「OBと語る会」の議論が始まったと記憶しています。OB会として「何か大学にお役に立ちたい」との想いと、教職員の「学生の勉学意欲向上や社会人としての心構え育成」に対する想いとが巧く一致した良い企画だと思っていました。その後先生方やOB会の方々の並々ならぬ熱意の下で5年を経過し、大学にも認知されるようになってきた事は大変素晴らしい事と思っております。講師になるOBは現役で活躍される若手のバリバリと思っておりましたので、本年6月末に一線を退いた小生にお声が掛かった時はお受けすべきか多少躊躇しました。しかしこの10年余り学生採用の最終面接に携わり、多少感じる事もあったのでお引き受けする事に致しました。

小生メーカーに入社以来、研究部門から始まって技術、生産、そして経営と歩んで来ましたが、年とともにモノづくりの魅力に惹かれてゆきました。モノづくりの魅力って何でしょう。「モノづくりはヒトづくり」とは正に言い得て妙で、モノづくりはそこに介在するヒトによっていか様にも変わります。金を掛けた大層な装置を導入しても、それを動かすヒトによって結果が全く違ってきます。同じ機械を海外に持って行って使っても、国内並みのパフォーマンスが得られないなんて話は枚挙に暇がありません。モノづくりはヒトが要で、日本のモノづくりの強さの源泉です。モノづくりに携わる人達の改革の熱い思いがある限り、日本のモノづくりは進化し続けてゆくでしょう。

今、生産の現場では「流れ」を非常に大切にしています。モノやヒトの流れを停滞させる事なく、究極の無駄の排除を目指しています。製造現場では良く七つの無駄なんて言われていますが、最大の無駄は造り過ぎです。造り過ぎはお金を無駄に寝かせてしまうばかりでなく、あらゆる無駄を隠してしまいます。トヨタ生産方式を始めとして色々な生産方式が試みられていますが、目指す



所は造り過ぎないための方式と言っても過言ではありません。余計な在庫を持たず、売れる物だけを造る。売れたら補充する要領です。こんな単純な事が、実は極めて難しいのです。あらゆる改善の積み重ねがなければ、達成されません。余談ですが人間の身体も同じ事で、「排出したら摂取する」。これが健康の秘訣です。

とまあ、モノづくりに少しでも感心を持ってもらえたらと思って、こんな話をさせてもらいました。学生の理工離れが叫ばれて久しいですが、それ以上に学生のモノづくりに対する興味が薄れて来ているのはとっても寂しい限りです。採用の面接をすると、大半の学生が研究部門を志望します。製造部門志望なんて聞くと、嬉しくなって直ぐ入社の一歩サインを出してしまいました。研究と生産では時間のスパンが全く違います。2年も3年も結論の出ない研究なんてざらにあります。生産はそうはいきません。毎日が勝負です。研究と同じように創造性も強く要求されます。こんな緊張感のある職場はそうはありません。ここから喜びも苦しみも生まれてきます。

日本のモノづくりなんて大言壮語は申しませんが、OBと語る会を通じて学生のモノづくりに対する興味や理解が少しでも深まれば、こんな嬉しい事はありません。

OB と語る会

大平 賢利 (平成 18 年物工卒,
工学府機能発現工学専攻先端物質化学コース 榊原研 修士 2 年)

OB と語る会を催すにあたって、お忙しい中時間を割いて発表用資料を作ってください、大学まで足を運んでいただいた OB の皆様、誠にありがとうございました。企業および事業の紹介、仕事の内容、就職活動を行っていくうえでのアドバイス、どれも非常に参考になりました。また、職場の事からちょっとした質問まで話すことができた懇親会も大変有意義な時間でした。

これからは是非、OB と語る会を開催していただきたいと思います。

その内容について、もし同じ業界の OB の方が 3 人来ていただけたら、話を比較する事ができて面白いかもしれません。しかし、最も大切な事は出来るだけ多くの学生が参加する事だと私は考えます。そのために学生である私からの意見としては、それぞれ異なる業界の OB を招いていただきたいというのが 1 つです。1 人でも興味ある業界の OB の方がいらっしゃれば学生は参加すると思いますし、他の 2 人の話を聞く事で興味ある業界の幅が広がるということもあるかと思えます。様々な業界から呼んでいただいて回数を増やせば OB と語る会の認知度も上がってより多くの学生が参加するようになると思います。

また、OB の方の年齢層も重要な事だと思います。世代が違うとまた違う話が聞けるので非常に参考になります。企業の方が学生に何を求めているのか話していただけるとありがたいです。

開催する時期については、今回のように 11 月で適切かと思えます。ただ年が明けてからまたやるのも一つの



手だと思います。その頃になると就職活動の意識が高まっているので参加率は上がることでしょう。

学生がいかに参加するかにこだわった意見でしたが、私は今回 2 回とも参加させていただいて、どちらも来なかった学生が非常に勿体無いことをしたと感じる内容でしたので提案させていただきました。もっとたくさんの業界の方に来ていただいて、そうすることで学生がもっと集まるようになり OB と現役学生のつながりが強くなれば、この OB と語る会の価値はますます高くなることかと思えます。

十分に業界・企業研究を行っていない学生はたくさんいます。また、OB の方ならとても話しやすいので他の就職活動では聞く事のできない貴重な情報を得る事ができます。学生にとってこの OB と語る会は大いに役立つはずですので、大変な事とは承知していますが是非、さらに規模を大きくして続けて下さることをお願い申し上げます。